

# フェルディナン・ド・ソシュールの未完の「書物」の序文

著者	近藤 愛紀
雑誌名	研究論集
巻	93
ページ	189-195
発行年	2011-03
URL	<a href="http://doi.org/10.18956/00006138">http://doi.org/10.18956/00006138</a>

# フェルディナン・ド・ソシュールの未完の「書物」の序文

近 藤 愛 紀

## 要 旨

ソシュールの未完の書物『言葉の二重の本質について』の草稿の中に、「序文」という見出しが記された一節がある。一般に序文というものは、それほど重きを置いて読まれることはないであろう。だが、ソシュールの場合、その草稿の序文を読むと彼の言語理論のエッセンスが詰まっていることが分かる。本稿はその「序文」を巡る考察を主眼とし、彼の考えていた言語のいくつかの基本的真理とその相互関係を詳細に検討した。

キーワード：言葉の二重の本質、ソシュールの自筆原稿、基本的真理

## はじめに

1891年11月、ソシュールはジュネーブ大学就任講演を三回にわたっておこなった。その三回目の講演で、自らの「書物」の構想に少しだけ触れ、次のように述べている。「言葉の科学を混乱させる主要なものとしての言葉の役割について書かれた、特殊で非常に興味深い書物が、いつの日か登場するでしょう<sup>1)</sup>」。ソシュールは講演から日をおかずに、「書物」の企てに着手したと考えられる。表題は『言葉の二重の本質について』である。その草稿の中に「序文」という見出しが記された一節がある。

一般に「序文」というものは、読まれはするが、それほど重きを置かれるものではなく、大切なのは本文の内容にあると考えるのがごく自然であろう。だが、ソシュールの草稿に関しては、事はそう簡単にかたづけられないものがある。というのも、ソシュールの場合、そこに彼の言語理論のエッセンスが詰まっているからである。本稿はその序文を巡る考察を主眼とする。

## 1. ソシュールの自筆原稿

まず最初に、エングラールとブーケの校訂で2002年にフランスのガリマール社から刊行された、ソシュールの『一般言語学文書』から、その草稿の「序文」の冒頭のパラグラフ<sup>2)</sup>を抜き出し

て見ておきたい。

Il paraît impossible en fait de donner une prééminence à telle ou telle vérité de la linguistique, de manière à en faire le point de départ central : mais il y a cinq ou six vérités fondamentales qui sont tellement liées entre elles qu'on peut partir indifféremment de l'une ou de l'autre et qu'on arrivera logiquement à toutes les autres et à toute l'infime ramification des mêmes conséquences en partant de l'une quelconque d'entre elles.

以上が印刷刊行された活字のテキストである。次に、ソシュールの自筆原稿<sup>3)</sup>に沿って、同じパラグラフを見てみたい。< >は加筆・挿入された語(句)、[ ]は削除された語を示す。[ < > ]は一旦加筆されたものの、そのあと削除されたことを示す。

Il paraît [ < pratiquement > ] impossible < en fait > de donner une prééminence à telle ou telle vérité [ fondamentale ] de la linguistique, de manière à en faire le point de départ [ unique ] central : mais il y a cinq ou six vérités < fondamentales > qui sont tellement liées entre elles, qu'on peut partir indifféremment de l'une ou de l'autre, et qu'on arrivera logiquement à toutes les autres < et à toute l'infime ramification des mêmes conséquences > en partant de l'une quelconque d'entre elles.

確かに、印刷刊行され活字になったテキストは読みやすいが、ソシュールの思考の動きを消してしまっている。ソシュールの自筆原稿には推敲の跡が窺える。一度文章を書き終えたあと(あるいは途中での可能性もあるが)、加筆ないし削除をおこない修正を施している。語(句)の取舍選択の様子がはっきり見て取れ、一字一句も忽せにしない姿勢が感じられる。さらに、活字テキストと自筆原稿では、コンマの打ち方で異なっている箇所がある。

ここで、自筆原稿から読み取れることをいくつか挙げてみたい。

- (1) Il paraît と impossible の間に pratiquement を一旦書き加えたものの、それを線で消し、en fait に変えて impossible のすぐ後の位置に加筆した。
- (2) telle ou telle vérité の後にあった fundamental (単数形) を線で消し、fondamentales (複数形) にして cinq ou six vérités の後に移した。
- (3) le point de départ unique の unique を線で消し、central に直し、le point de départ central にした。パラグラフを書き終えたあと読み直し、全体の文脈に、より適合する表現に改めたようだ。
- (4) à toutes les autres の後に挿入の印を入れ、ページ左の余白に et à toute l'infime

ramification des mêmes conséquences と加筆した。

- (5) tellement liées entre elles と相関する qu'on peut partir～の前と et qu'on arrivera logiquement ～の前にコンマを打っている。活字テキストでは、そのコンマが取り去られている。

ここではその中から特にコンマの打ち方について考察を加えたい。編者が校訂したように、tellement～que は確かに普通は que の前にコンマを置かずに使われるが、ソシュールが qu' [=que] の前と et qu' [=que] の前にコンマを打った理由は十分納得できるのである。

「五つないし六つの基本的真理が相互にあまりにも結びついている」という事実がソシュールの意識には強烈に刻印されており、その事実を述べたあと、一呼吸置いてもう一度そこから帰結する事項を確認した上で、que 以下さらに et que 以下の事柄を叙述したと考えられる。

## 2. ソシュールの考えていた言語学の基本的真理

1章で検討した冒頭のパラグラフを、ソシュールが最終的に残したテキストに沿って日本語にすると次のようになる。

実際、言語学の何らかの真理に、それが主要な出発点となるように優位を与えるのは不可能に見える。だが、五つないし六つの基本的真理がある。それらの真理は相互にあまりにも結びついているので、そのいずれからでも区別なく出発でき、またいずれから出発しても論理的には他のすべての真理に、そして同じ帰結のあらゆる微細な分枝に到達するだろう。

ソシュールは次いで彼が真理と考えている事項の中から二つ挙げ、それらを考慮することが正確に同じ結果に達すると述べる。

「形態と意味とを対置するのは誤り（実行不可能）であり、それに反して、正しいのは、発声形像 (figure vocale) と形態—意味を対置させることである」という基本的事実を考慮するだけで十分と言えよう。実際、この考えを厳密に追求する者は誰でも、次のような見かけはたいへん隔たった原則「言語においては、内部の、すなわち意識の現象と、直接把握できる外部の現象を識別する必要がある」から出発しようとする者と、正確に同じ結果に達する<sup>4)</sup>。

以上の一節が第二パラグラフを成し、先に見た冒頭のパラグラフと合わせて、「序文」の全

体を構成している。ここでソシュールが挙げている二つの真理（原則）がどうつながるのかは、一見しただけでは捉えがたい。この箇所から理解されるのは、発声形像か形態—意味〔形態と意味の結びつき〕のどちらか一方が内部、すなわち意識の現象であり、もう一方が外部の現象であるということだろう。この箇所をただ眺めているだけでは、どちらが内部で、どちらが外部かは判然としない。我々は、ソシュールの真意を捉えるために、この草稿の他の箇所、あるいは別の草稿を参照したい。

『言葉の二重の本質について』の草稿の中に、「索引」という見出しがつけられたものがあり、そこでソシュールは、「形態」について、次のように記述している。「形態。——決して、発声形像の同義語ではない。一つの意味あるいは一つの用法の存在を必ず前提とする。内部の諸事実の範疇に属する<sup>9)</sup>。以上から、形態は、必ず意味、あるいは用法を伴うもので、内部の事実であることが分かる。

さらに、1893年から1894年の間に執筆されたと推測される「一般言語学に関する書物のためのノート」の中に次のような一節を見出せる（但しこの草稿のタイトルはソシュール自身によるものではなく、最初に草稿の分類・整理を手がけたロベール・ゴデルによって付けられた）。

物理音に対置できそうなものの中で、私が、本質的にこの先きっぱりと否定するのは、それに観念を対置できるということである。物理音に対置できるのは、音—観念のグループであって、絶対に観念ではない<sup>6)</sup>。

この草稿では、物理音と音—観念のグループ〔音と観念の結びつき〕を対置させている。我々が解明しようとしている草稿では、発声形像と形態—意味〔形態と意味の結びつき〕が対置されている。この二つの草稿がほぼ同じ内容を表しているものだとすれば、発声形像は物理音に、形態—意味は音—観念に対応することになるだろう。さらに、1908年11月5日の「第二回一般言語学講義」の初回の授業で、ソシュールが次のように述べたのを、聴講した学生がノートに書き留めている。

発声音が言語を成り立たせるのか。発声音は思考の道具であるが（この言い方は誤解を招きやすい。そう言うことで、音に自立性を与える恐れがある）、思考と無関係に、それ自体のために存在するのではない。〔先ほど、「音節が発音される際に、聴覚印象と調音の対応がある」のを見たが〕ここに再び恐るべき対応〔発声音と思考（意味）の対応〕がある。発声音は一つの語である、しかしながら、それは常に発声音に意味が結びついている限りにおいてである<sup>7)</sup>。

発声音は意味と結びついている限りで言語音であり、その結びつきが語を成立させている。形態を（無理やり）意味から分離させて、形態をそれ自体として語ろうとすれば、語られるや否や、それは発声形像（物理音）になるということでもある。

だがここで、発声形像が物理音という音であり、形態も音（音形）であるなら、この二つのものの違いは何かという疑問が湧いてこよう。ソシュールは『言葉の二重の本質について』の「形態—発声形像」の項でこの疑問に答えようとしている。

一つの発声形像は、それが言語と呼ばれる諸記号の働きの中に取り入れられる決定的瞬間から、一つの形態になる<sup>8)</sup>。

そこで、同じ草稿の中で、ソシュールが記号をどのように捉えているかを見ておくことが必要となる。「記号学」の項で次のように述べられている。

言語にあっては、そのどの瞬間も、言語学的な観点からは、意識によって知覚されるもの、すなわち記号であるもの、記号となるものだけが存在する<sup>9)</sup>。

この一節を参照することで、多くのことが一本の筋となって解明される。「意識によって知覚されるもの」とは、「記号」を指す。つまり、「形態と意味の結びつき」が「記号」であるならば、それが「意識の現象」すなわち「言語の内部の現象」であり、「発声形像」が「外部の現象」ということになる。「発声形像」それ自体は、言葉でさえなく、耳慣れない音の組み合わせである。音の連なりは、どこまでいっても音の連なりでしかない。同じ音が、ある言語においては意味を伴わないただの音声となり、ある言語においては記号となる。ソシュールは具体的な音節として *alka* をあげているが、日本語の話者であれば、「有るか（在るか）」という語句を想起するであろう。

さらに、1894年に書かれたと推定される「形態論」の草稿では、「記号」に関して、次のように述べられている。

形態論とは観念の一部分に対応する音の単位、およびこうした単位の集合を扱う科学である。（……）形態論の本当の名称は、記号理論であろう。（……）。形態論が各々の記号を定義し、境界画定し、それらに役割をあてがうためには、形態論は同じ体系のそのほかの記号のなかに指標となる手がかりを絶対に持たなければならない。

（……）言語は記号としてしか、音を意識しない。（中略）現実（実在）のもの、それは話し手たちが何らかの度合いで意識するものである。話し手たちが意識するすべてのも

のであり、彼らが意識しうることだけである。

ところで、あらゆる言語状態において話し手たちは、形態論的単位、すなわち意味を表す単位を意識する<sup>10)</sup>。

話し手が意識するのは意味を担った音＝単位だけである。そうした単位が言語学の対象である言語 (langue) を形成しているということと、形態論は意味に対応した音、すなわち記号しか扱わないということとは、相即不離なのである<sup>11)</sup>。

ここまで検討したことをまとめると次のようになる。

- (1) 「意識の現象」とは、話し手が「何らかの度合いで意識する」単位であり、それを別の用語で言うと「記号」になる。これは、言語にとって「内部の現象」である。
- (2) 実際には不可能と思われるが、形態を意味から切り離すと、「発声形像」になり、それは「物理音」と等しくなり、音として把握されても、話し手には言語音とは意識されず、言語にとっては「外部の現象」となる<sup>12)</sup>。

一見かけ離れたように見える真理 (原則) が、そのいずれから出発しても同じ結論に到達するとソシュールが述べていた真意を我々はほぼ解明できたように思う。ソシュールが考えていた他の真理については、稿を改めて論じたい。

## おわりに

話し手に意識される「形態と意味の結びつき」が記号であるが、言語はそれらの記号から成る体系である。言語の特異性は、体系の構成要素＝単位である記号が「形態と意味」という異質のものが一つとなって初めて存在する、ということにある。『言葉の二重の本質について』という表題から既に言語現象の尋常ならざる性質が窺えよう。もし仮にそれが、『言葉の本質』という表題であれば普通であるが、『二重の本質』とされているからである。本質が「そのものを、そのものたらしめる上で欠かすことができない、最も大事な根本的な性質」であるとすれば、それが二重であるということは、言語が普通では有り得ない、極めて特異な本性を持つことを示していると言えるだろう。

註

- 1) Ferdinand de Saussure, *Ecrits de linguistique générale*, texte établi et édité par Simon Bouquet et Rudolf Engler, Paris: Gallimard, 2002, p.166.  
再出より *ELG* と略す。
- 2) *ELG*, p.17.
- 3) ソシュールの草稿はジュネーヴ図書館に保管されている。資料番号 Ms.Saussure.372bis.
- 4) *ELG*, p.17.
- 5) *Ibid*, p.81
- 6) *Ibid*, p.202.
- 7) F.de.Saussure, 《Cours de linguistique générale (1908～1909), Introduction》, édition critique par Robert Godel, *Cahiers Ferdinand de Saussure* 15, 1957, pp.7-8.
- 8) *ELG*, p.38. この項のタイトルはソシュール自身によるものではなく、校訂者のエングララーによる。
- 9) *ELG*, p.45. この項のタイトルはソシュール自身によるものではなく、校訂者のエングララーによる。
- 10) *ELG*, pp.182-184.
- 11) ソシュールは現代の形態論の方向を先取りしている。影山太郎は「形態論から見えてきた新しい意味機能」(『言語』第36巻第8号、2007年8月、24-25頁)において次のように述べている。「形態論(morphology)というのは、形態(morph-)の学問(-ology)という名前が示す通り、元来は単語の形を扱う分野である。単語内部の仕組みを扱う形態論と、単語を配列して句や文を作る仕組みを扱う構文論ないし統語論(syntax)とを併せて文法(grammar)と見なすのが、従来の構図である。(中略)二つの辞典[『研究社英語学辞典』(1940年)と『日本語文法大辞典』(明治書院、2001年)]に共通することは、形態論を形態素および単語の形だけを扱うものに限定していることである。しかしながら、言語を成り立たせているのは、形だけではない。形は常に意味を伴う。形と意味の関係を明らかにするのが言語学の任務であるとするなら、形のみを切り離す(あるいは逆に意味だけを切り離す)のは妥当でない。このように考えると、形態論というのは、『単語および形態素の構造、意味、音声、および統語的用法を総合的に明らかにする分野』として再定義できる。実際、現在の形態論の最先端の研究はそのような捉え方で進んでおり、形態論をこのように幅広く捉えることで、これまで気づかなかったことが見えてくる」。
- 12) ここでソシュールは考慮に入れていないが、物理音が何かを表す記号になることも有りうる。例えば、ノックの音は、訪問や入室を知らせる合図となる(但し、こうしたことが慣習として成立していない文化圏においては、記号として働かない場合も考えられる)。なぜソシュールがこのような物理音を考察していないかに関しては、稿を改めて論じたい。

(こんどう・まなき 国際言語学部教授)



